

海外の話題

シンガポールの劇場で思う「未消化な発展」

農林中央金庫 シンガポール支店長 松本 恭幸

南国の夜にライトアップされるマリーナベイ・サンズ。宝石のような光を無数に放つフィナンシャルセンター。ベースとドラムのビートにのって若者の歓喜を咆哮する飲食街。SMAPが登場するソフトバンクの宣伝のおかげで、シンガポールは再び日本人の観光意欲をそそる国となった。中国や周辺アジア諸国からもカジノやユニバーサルスタジオを目当てに観光客の増加が著しい。そして、シンガポールのエンブレムもラッフルズホテルやマーライオンからマリーナベイを囲むモダンな都市空間へと替わった。オリエンタリズムやコロニアリズムで語られてきたシンガポールはアジアのメトロポリタニズムを象徴する国へと変容したかのようだ。

このメトロポリスを代表する劇場もヴィクトリア様式の影響を受けて建設されたヴィクトリアホールから、その前衛的な外見で「(果物の)ドリアン」と称される総合劇場エスプラネード (Esplanade) へと移った。ここでは、交響楽、オペラ、バレエ等の西欧クラシックからインドのシタール、インドネシアのガムラン等の東洋器楽まで幅広いジャンルの公演が行われ、政府が進める文化拠点都市 (Cultural Hub City) 政策を遂行する場が提供されている。また、エスプラネードはシンガポールが単なる経済都市から本格的なメトロポリスへの脱皮に必要な機能のひとつとも言えるだろう。

このエスプラネードで、10年ぶりにSSO (Singapore Symphony Orchestra) の演奏を聴く機会を得た。演目はラフマニノフのピアノ協奏曲第二番とチャイコフスキーの交響曲第四番。指揮者は円熟の頂点に達しつつあるウラジミール・アシュケナージ、ピアニストは新進気鋭のイタリア人ピアニスト。マエストロの指揮棒にピアニストとオーケストラ各パートのソロ奏者は、輝きと繊細さをもってロシア音楽のロマンチズムを謳いあげた。ところが、合奏パートに入ると音楽は数秒前までの芳醇さを失いモノカラーとなり、再びソロパートに入って瑞々しさを取り戻した。SSOは10年前と比べると間違いなく上手くはなったが、人材の層は未だ薄い。ソロ奏者に依然外国人が多く、人材の手薄な管打楽器の外国人依存は著しい。未だ自分自身の音楽を持つに至っていない途上過程のオーケストラの演奏であった。

さらに、エスプラネードではSLO (Singapore Lyric Opera) によるリヒャルト・シュトラウスの歌劇「サロメ」の公演も鑑賞した。タイトルロールのサロメと主役級のヨカナン、ヘロデ王、王妃ヘロディアスは全て外国からの客演歌手。彼らは「我の声を聞き、我の表情を見よ」とばかりに大胆な演技からベルカントな歌を聴衆に放った。一方、当地の歌手は、か細い声とごこちない演技で大人の前で虚勢を張る子供のようであった。オペラ全体はあまりの実力差からバランスとまとまりを欠くものとなってしまう、原作「サロメ」が持つサディスティックなエロティシズムを醸し出すことは出来ずに幕となった。

これら2つの公演から皮肉にも感じられるものは「未消化な発展」であり、シンガポールや他の新興諸国が抱える悩みと課題そのものである。シンガポールは1965年の独立以来、急速な経済発展を遂げ、一人当たり名目GDP (2010年) は4万3千ドル超で日本を凌駕、ビジネス環境としてもアジア最上位の評価に至った。マレーシアとインドネシアからの政治的、軍事的緊張に日々晒されているこの小国は、海上交通の要衝地という地理的優位性を最大限に生かし、先進諸国の資本と英知を積極的に取り入れて発展を推し進めてきた。シンガポールには先進諸国で生まれた全ての逸品があると言っても過言ではない。しかし、それらの舶来品は落ち着きのない未消化なものとしてこの国にビルトインされ、発展と共に変化する社会文化に居心地の悪さを与えている感じがしてならない。

この未消化は原産国のものを完全に複製することだけで解決されない。シンガポールを含む東南アジアの海峡植民地では、福建、潮州、広東等出身の海峡華人が現地マレー文化を取り入れて独自のプラナカン文化を育んだという歴史がある。現代のシンガポリアンにも先進諸国から輸入したものを独自の文化に消化する潜在力があると信じていたい。SSOが自分自身の音楽を持ち、マリーナベイの都市空間がシンガポール自身の風景になり、進行中のメトロポリタニズムが本物となるのは、この消化力の如何によるだろう。アジアの地に約20年間関わり、常に居心地の悪い未消化を感じてきたものとして、勤務地シンガポールが真の発展へ歩み出すことを祈りつつ、新年の挨拶としたい。